金春禅竹の胡麻章

―施譜法とアクセント反映度―

坂本清恵

一　はじめに

日本の伝統音楽では、歌詞のアクセントの高低を利用して旋律が決まり、メロディーには作曲当時のアクセントが反映されるといわれている。これまで、日本語アクセント史資料としては、『四座講式』『補忘記』をはじめとする声明譜や『平家正節』などの平曲譜、義太夫節浄瑠璃の胡麻章などが利用されてきた。能の譜本類については、世阿弥自筆能本の声点と胡麻章がアクセント資料となるが、謡本の胡麻章はアクセント資料としての活用が十分にされていない(1)。これは、現行の謡において、声の上げ下げと胡麻章とが、ほとんど関係のないものになっているからかもしれない。また、謡本の胡麻章がアクセントよりも節を活かすためのものと考えられていることも、利用しにくいものにしているのだろう。

本稿では、国文学研究資料館所蔵となった金春禅竹（一四〇五～一四七一年以前）自筆の能楽伝書『五音三曲集』に付された胡麻章を検討し、アクセント史資料としての能楽資料の可能性を探る。

当該書は、国文学研究資料館影印叢書第二巻『金春禅竹自筆能楽伝書』（一九九七年・汲古書院刊）に影印と翻刻、樹下文隆氏による解題が掲載され、現在はホームページで公開されている(2)。奥付に「長禄四年十一月十一日　金春竹田秦翁　氏信（花押）」とある金春禅竹自筆である。

また、『五音三曲集』については金春禅竹自筆本か

ら写したものを金春安照（一五四九～一六二一年）が安喜（一五八八～一六六一年）に伝えたものが、八左衛門本として知られている。「金春八郎　秦安照（花押）」と、「明暦二年丙申三月五日」安喜の七左衛門宛の奥書を持つ。表章・伊藤正義校注『金春古傳書集成』（一九六九年・わんや書店）によれば、本文は安喜筆という。同書に節付け部分の影印が掲載されたが、これも現在は野上記念法政大学能楽研究所のホームページで公開されている(3)。

本稿では、この二本を比較しながら、禅竹の施譜について考察を行う。引用にあたり、自筆本は「自」、八左衛門本は「安」とすることもある。胡麻章を示す場合、上げ胡麻はU、平胡麻はS、下げ胡麻はD、下降にはF、そのほかは＊、胡麻なしは×で表記する。なお、アクセント史の参考資料については、秋永一枝他編『日本語アクセント史総合資料　索引篇』（一九九七年・東京堂出版）の略称を用いて示す。

二　謡の「訛り」とアクセント

世阿弥が『音曲口伝』に記した「訛り」についての見解は、音曲における「訛り」がアクセントに関することであるとして伝承されてきた(4)。

一曲に訛る事。節訛りは苦しからず。文字訛りは悪し。文字訛りと申は、一切の文字は、声が違へば訛る也。節訛りと申は、てにはの仮名の声なり。てにはの字の声は、言ひ流す言葉の吟のなびきによりて、声が違へども、節だによければ苦しからず。能々心得て口伝すべし。

「文字訛り」が自立語のアクセントの訛りで、「節訛り」が助詞などの付属語のアクセントの訛りであると考えられている(5)。しかし、世阿弥は「文字訛り」に強く拘泥したわけではなく、『五音曲条々』の「恋慕」では

文字ヲ少シ訛ル匂イニ色ドリテ、曲ヲ埋ミ、感ヲアラハス音聞也。コノ訛ルト云声ザシ、ヨクく知ベシ。抑、訛ルト云事、大事アリ。訛ルヲ、タヾ悪キ事ノミニ、一偏ニハ思ウベカラズ。声明・伽陀ナドニモ、訛ル響キナクテハカナハヌ曲アルベシ。軽・重・清・濁ハ上ニヨリ、又便音ナド申モ、コノ訛ル用音ナリ。ヨク訛リ、悪シク訛ルコト、是非ノ分目、分明ニ知ルベキ也。ヨキ訛リは、音曲ノ花トモナル也。ソレハ、訛ルトモ聞エマジキ也。

のように「訛り」を必ずしも悪いこととせず、声明類でも訛る響きがあることを指摘し、良い「訛り」は「音曲の花」となると説く。また『申楽談儀』において「昔の大和音曲は、さしてかゝりなければ、文字訛よく聞

ゆ。かゝりだによければ、訛りは隠るゝ也。」と「訛り」よりも「かゝり」を優先している。ただし、後世の謡伝書では「節訛り」は節付けのなされた箇所でアクセントに外れることに解釈されるようになる(6)。

世阿弥自筆本の声点と胡麻章は、ともにアクセント体系変化後のアクセントを反映する。しかし、声点はアクセントに忠実であるものの、胡麻章には語頭低下や、下降位置のずれなど、自立語であってもアクセントに外れる高低がみられる。アクセントに忠実にというよりも実際には節付けを優先したのである。

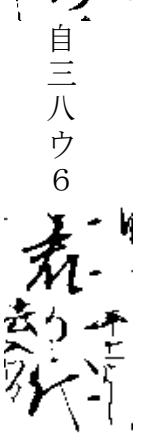
これに対し、禅竹の『五音三曲集』（自三八ウ）では、助詞のアクセントに及ぶ記述がある。

一四性之事。（平上去入）の四正なり。去入性は。下手の好むところなり。悦をのへし君が代（平上よし・去入わるし）のすくなる道をあらはすの。かの字なり。直に言ふへき性をおとすなり。おとすは入性なり。おとすが悪きそといへは。あくる。去性に又なるなり。正路のすくなる性を。可知なり。

右の説明によれば、入声は下降調、去声は上昇調と考えられていたと思われる。ともに文字単位の声調ではなく、語内の下降調、上昇調を示す新しい四声観に基づく記述である。

ここでは助詞「が」のアクセントについて触れているが、「君」は第一類名詞で、助詞「が」がついてＨＨとなる。この部分にはアクセントどおり、左のように「君が《ＵＵＵ》」と上げ胡麻が付されている。

自三八ウ６


安五三オ５

説明では、「おとすは入性」では、「君」に「が」が続き、ＨＨＬとなり、「去性に又なる」では「が」で上がり、ＬＬＨとなる。ともに第一類名詞から一般助詞に続くＨＨＨのアクセントから外れることになる。

以上のように禅竹の記述は、助詞「が」のアクセントにも厳しい姿勢がうかがえ、「節訛り」を「苦しからず」とする世阿弥の訛りに対する意識とは異なる。これからすると、禅竹の胡麻章はアクセントに忠実に施されている可能性があろう。

三　『五音三曲集』の胡麻章

禅竹自筆の『五音三曲集』は「仮綴袋綴本」の原態を現在は保っておらず、一葉ずつになってしまっている。本文、識語とも同筆で、謡引用部分に朱で節、胡麻章、区切りが示されている。樹下文隆氏の解題にあるとおり、謡引用部分の多くは胡麻章などが本文右側

に付されているが、二〇丁オ・二二丁オ・二三丁オ・二五丁オ・三〇丁オの第一行目の節付けの全部または一部が左側になっている。綴じられた本に書き込みをし、綴じ目がきついため、左側に胡麻章を付したと考えられるという。まず、この文字の左側に付された胡麻章について確認を行っておく。

［三―一］胡麻章の施譜法

謡の胡麻章については、世阿弥から現代の謡本まで本文の右側に付されるのが一般的であり、これは節博士の付け方の一つである。節博士は、起源である声点と同様、初めは漢字の左右両側に直線を配した。そのうち、字の左側から斜め上方に伸びた「＼」（徴譜）と、字の左側に横に伸びた「―」（角譜）の二つが語音の高低に関わり、徴が高拍、角が低拍を表すと解釈される。しかし、『四座講式』のうち大慈院本は字の右側から斜め上方に伸びた「／」（斗譜）が高拍を、横に伸びた「―」（十譜）が低拍を示しており(7)、このような施譜法が、胡麻章に受け継がれていったと考えられる。

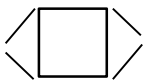
『五音三曲集』の文字の左側の胡麻章は、節博士の施譜法と同じもので、文字の左側から外に向かって付けられていると解釈できる。右側と対称の向きである。以下、左側に付された胡麻章の施譜例を挙げる。

自二〇オ１

まず、「秋の」に付された胡麻章を、右側に付した例と比べてみる。

自八オ２

胡麻章は次のように文字から出ていて、左右対称になっている。

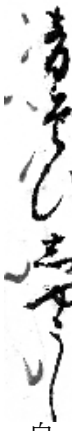

右側の胡麻章《ＤＵ》

左側の胡麻章《ＤＵ》

「秋」は第五類でＬＦであるが、左側の胡麻は「秋の」《ＤＵＤ》なので、ＬＦＬのアクセントを反映している。右側の八オ２の胡麻章は「秋の」に《ＤＵＵ》で助詞のアクセントは合わないが、「秋」部分の胡麻章の高低は同じである。

「秋の」に続く「光」「朝」にはともに《ＵＵＵ》で、ＨＨＨを示す胡麻が続く。「光」「朝」とも第四類

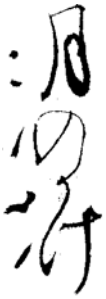
なので、アクセント体系変化後はＨＨＬであり、厳密にはアクセントを反映してはいない。「そうし（増）」はＬＨＬを示す胡麻だが、『補忘』「増スル〈上濁上濁×〉《徴徴徴》」（貞享版上一三ウ７）、「増スル〈上濁上濁上？〉（元禄版上三五オ４）のＨＨＨの例があり、アクセントには合わない。


自二二オ１

「音」《ＵＤ》第二類でＨＬ、「そひ（添）」《ＵＤ》は第一類動詞で連用形ＨＬなので、これもよくアクセントを反映している。「しやうし（生死）」は『平節』『国訛』にＬＨＬがあり、胡麻章の高低と合致する。

自二三オ１

「な」の胡麻章は低高を示しており、「難波の」ＬＨＨＨのアクセントを反映するとできるか。「難波」は『人紀・古今・袖中・近松』にＬＨＨ、現代京都ＬＬＨである。「事」《ＵＤ》の胡麻章は、第三類のアクセント体系変化後のＨＬを反映する。


自二三オ１

「月の」《ＳＳＤ》は第三類「月」に「の」が接続し、古くＬＬＬだったものが、ＨＨＬとなった体系変化後のアクセントに合致する。また、「かけ（影）」は第五類で、ＬＦなので上昇のあと下がる胡麻はアクセントを反映するとみてよい。

文字の左側への胡麻施譜について確認したが、これらの胡麻章は八左衛門本でも左側に写されている。禅竹自筆本では綴じ目のノドのきつい部分の右側には胡麻章を付すことができないため左側に付したのだが、八左衛門本はノドの位置ではないにもかかわらず、自筆本どおりに左側に胡麻章を写している。安喜は、書写にあたり、仮名の字母、仮名遣い、行詰めなどを模写してはいないが、胡麻章を写す場合には自筆本を忠実に書き留めたのである。

禅竹は節博士の形式もよく理解していたと考えられよう。また、禅竹自筆本を書写するにあたり、安喜が右側に付け直さなかったということは、後世もそれを理解したのであろう。声明関係の譜を目にすることもあったのだろうか。

［三―二］胡麻章の変更

禅竹自筆の『五音三曲集』には胡麻章を改めた部分が見られる。禅竹が自ら手を入れたと思われるが、ア

クセントに外れないための変更なのかどうかを検討する。現在、原本を見てもどちらの胡麻章を先に書いたのか判別が難しいところもある。そこで、後世これをどう理解して伝えたのかを見るため、金春八左衛門本を参照する。なお、禅竹の胡麻章は、いわゆるアクセント体系変化後のアクセントである。

「祝言第二・理世撫民の曲味」の『放生川』の例からみる。

①

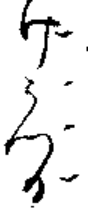
自四オ２

安五オ３

「かけ（影）」≪ＵＵ≫から≪ＳＵ≫に変更し、第五類ＬＦのアクセントを反映したものになっている。八左衛門本は訂正前のままか、平胡麻がやや右上がりに見える。続く「うつる≪ＵＳ＊≫」は第二類動詞ＨＬＬのアクセントをよく反映している。

この箇所は『五音三曲集』後半、「節ノ事」の「上節」に同例があるのだが、胡麻章が大きく異なる。

自二九ウ３



安四〇オ７

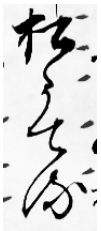
「影」「映る」の胡麻章はともにアクセントには合致しない。特に「うつる」への胡麻章は第一類動詞のような≪ＵＵ＊≫である。

上節はのほりふし。行教和尚の御法の水にかけうつるの。うつるなり呂より。羽宮の律にかゝるあはひのふしなれはのほりふしといへり。

とあり、「うつる」が「上節」で「羽宮」の節付けになっているという。「上節」にするとアクセントに外れ、ＨＬＬがＨＨＨになる、高が続く節付けになるということか。

②

自四オ８



安五ウ３

「松」≪ＵＵ≫から≪ＤＵ≫に変更するが、八左衛門本は平らに写している。「松」は第四類ＬＨのアクセントで、変更によりアクセントを反映する。続く「たてる（立）」は第二類動詞に助動詞「り」が続き、ＬＨＬが推定されるが、胡麻章≪ＵＵＵ≫はそれを反映していない。

「祝言第四・竹躰曲味」の『佐保山』の「指声」部分の変更をみる。

③

自六ウ１

「ひろき」の胡麻章を≪ＵＵＵ≫から≪ＵＤＵ≫に変更、「ありかたさよ」の胡麻章≪ＵＵＵＵ＊×≫から≪ＤＵＵＵ＊×≫に変更している。

「広し」は第二類形容詞であり、ＨＬＬのアクセン

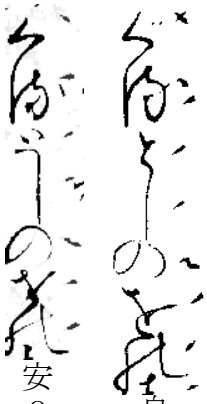
トを反映させた胡麻章に変更したことになる。変更後の≪UDU≫はHLHの旋律で、アクセントとしてはHLLを反映する(8)。

「ありがたし」はアクセント体系変化後の『平節・近松』にHHLLLの例があり、古くは低起式のアクセントであり、その名詞形はLLLLL>HHHHL、あるいは安定型であるLLLHL>HHLLLの変化を想定できるが、第二類動詞「あり（有）」のアクセントを際立たせたLHHHLに変更をしたものであろうか。

安八ウ3

八左衛門本では、「ひろき」の「ひ」に自筆本では「山」に付した胡麻章をずらして写し、HLLのアクセントを反映する≪UDU≫を採用していないように見える。第二類形容詞連用形へのLHLの類推で語頭を下げる節付けと捉えたものか。

④


自六ウ5

安9オ2

「くる」≪UU≫を≪DU≫に変更し、八左衛門本は変更後の胡麻章を写している。「来る」と「繰る」の掛詞であろうが、どちらも第二類動詞でLHのアクセントである。変更後の胡麻章がアクセントを反映している。

⑤

自六ウ2

安八ウ4

「あひあふ」の胡麻章を≪UUUD≫から≪DUUD≫に変更、「はるの」の胡麻章≪DUU≫から≪DUD≫に変更をしている。

「相合ふ」は第二類動詞「合ふ」の接頭辞化「あひ」と第二類動詞の派生動詞とすれば、低起式多数形LLLH>HHLLを推定することができ、胡麻章の変更前はこれを付したと考えられる。語頭を低く変更しているのは、派生動詞としてアクセント体系変化したものではなく、室町期に結合し、「あひ」の低起式を留める胡麻施譜にしたのであろう。

「春の」は第五類LFのアクセントで、助詞「の」は「る」の下降に伴い低く続き、訂正後の≪DUD≫の胡麻章がよりアクセントを反映する。ただし、次の「色≪DU≫」は第三類HLなのでアクセントと胡麻章の高低が逆転する。「色」の下に区切りの朱点がつ

いており、ここで息継ぎをすることがわかる。区切りの胡麻として、≪DU≫が付されていると考えられる(9)。

八左衛門本では「の」の胡麻章を訂正ではなく、一つの胡麻章として写している。

「幽玄第三・見様曲味」の『田村』の例をみる。

⑥

自一一ウ2

安一五ウ4

「花の」≪UU|*≫から≪UD|*≫に変更し、八左衛門本は変更した胡麻章を写す。第三類「花」はアクセント体系変化後HLであるが、「の」が続く場合にはLLL>HHLへの変化例もみられる。「花」単独のアクセントとして厳密に胡麻章を訂正している。

⑦

自一一ウ7

安一六オ4

「清水」≪UUU|≫から≪UDUU|≫に変更し、八左衛門本も同じである。変更後はHLLLのアクセントを反映する。「清水」の古いアクセント例はないが、現代京都HLLLである。第二類形容詞「清し」を前部に持ち、後部が第一類「水」の複合なので安定型LLHLからHLLLに変化したアクセントを推定することができ、これに合致している。

⑧

自一二オ2・3

安一六ウ1

「ゑゝりや（酔）」≪UU|**≫から≪DU|**≫へ、「おもしろの（面白）」≪UUUD|≫から≪UUDUD≫に変更しており、八左衛門本も同じである。

「酔ふ」は第二類動詞であり、変更後はLHのアクセントを反映する。「面白」は変更後にHHLLを反映する。「面白」はアクセント変化前の『古語・袖中』にLLLHの例があり、これが体系変化しHHLLとなったと推定できるので、アクセントどおりの胡麻章に訂正したことになる。

「戀慕・濃躰曲味」の『班女』の「指声」「曲節舞」部分の訂正をみる。

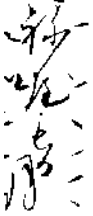
⑨

自一六オ5

安二二ウ1

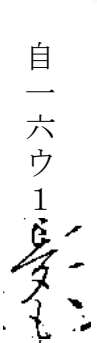
自筆本は「別を」≪ＵＵＵ|≫から≪ＵＵＤ|≫に変更、助詞の高さはそのままである。「別れ」は第四類でＨＨＬであるが、アクセントに忠実に改めるのであれば、助詞「を」までを≪ＵＵＤＤ≫と付すことになろう。八左衛門本は変更した≪ＵＵＤＵ≫を写す。続く「もよほし」はＨＬＬＬを反映する。体系変化前に「もよほす」は『名義・四座』ＬＬＨＬの例があり、連用形はＬＬＨＬからＨＬＬＬへと変化したと考えられ、胡麻章はアクセントと合致している。

⑩
自一六オ６

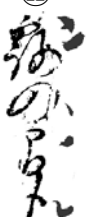

安二二ウ１

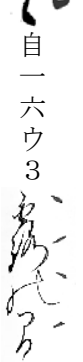
自筆本は「ねや（寝屋）」≪ＵＵ|≫から≪ＤＵ|≫訂正、八左衛門本はやや平らな変更した胡麻章を写す。「寝屋」は『和名・名義・近松』ＨＨで、変更前の方がアクセントに合致する。語頭低下の例であろう。続く「漏る≪ＤＵ≫」は第二類動詞ＬＨのアクセントを、「月≪ＵＤ≫」は第三類ＨＬのアクセントを胡麻章はよく反映している。

⑪
自一六ウ１

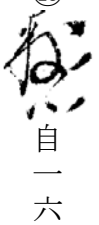

安二三ウ４

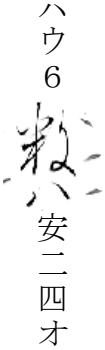
「ゆめも」≪ＵＤＤ|≫から≪ＵＳＤ|≫に変更するが、アクセントは第三類ＨＬを反映する。八左衛門本は変更後の胡麻を写している。

⑫ 
自一六ウ３


安二三ウ７

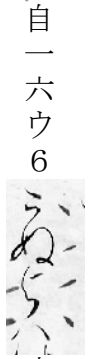
「露の」≪ＵＵＤ|≫から≪ＤＵＤ|≫に変更して、第五類ＬＦのアクセントに忠実な胡麻章にしている。八左衛門本も同様である。

⑬ 
自一六ウ６


安二四オ４

第四類「数」ＬＨＨは、≪ＵＵ|≫から≪ＤＵ|≫に変更し、アクセントに合う。八左衛門本は変更後の胡麻章を写す。

⑭
自一六ウ６


安二四オ５

「来ぬ夜は」に≪ＵＵＵＤ|≫を≪ＤＵＵＤ|≫に変更、八左衛門本は変更した胡麻章を写す。「来」は第二類動詞、『平節』の例に「来ぬ≪上上≫」（11 上妓王 71-4 折声）があり、訂正前の胡麻章がアクセントを反映するのだが、連体形などの低起式にひかれて訂正を行っ

たか。

次に「戀慕第二・麗躰曲味」の『松風』の「うたふ」の例をみる。

⑮

自一八ウ7　安二六ウ5

自筆本の「おなし世に」≪UUUU≫を≪UDUSU≫に変更をし、八左衛門本はそれを写す。「同じ」は第二類相当でHLLのアクセント、「世」は第一類だが、現代京都は上昇調である。「世に」の後に区切り点があり、⑤に述べた「色」の胡麻章と同様の施譜であろう。

⑯

自一八ウ8　安二六ウ6

自筆本は「よしなし」≪DDDF≫から≪UUDF≫に変更を行ったとみられる。「よしなし」は『名義』にHHLF、『平節』にHHLLの例がある。訂正後の胡麻章もHHLLを反映していたとみられる。八左衛門本は訂正前の胡麻章を採用したものか、低く始まる「良し」の影響を受けた胡麻章を付したか。

次に「哀傷・魂白躰味」の「指声」の例をみる。

⑰

自一九ウ7　安二七オ4

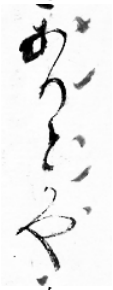
「きえんとす（消）」の≪UUUUUD≫から≪UUDUD≫に変更し、八左衛門本は変更前を写したか。第一類動詞「消ゆ」に助動詞「ん」が付いた例としては『平節』にHHH（11下小教43-4口説）があり、変更前のほうがアクセントに合う。

⑱

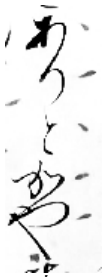
自一九ウ9　安二六オ6

「つけ（告げ）」≪UD≫から≪FU≫に変更する。≪F≫は下降を示し、「告ぐ」は第一類動詞で「つげ」はHLでこれを保ちつつ、「け」の下に区切り点があるので、上げ胡麻で上昇し、⑤「色」の胡麻章と同様の区切りを現す胡麻章の可能性もあろう。

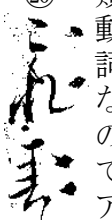
八左衛門本は≪DU≫に写しており、区切りの胡麻章として捉えたのであろう。

⑲ 

自一九ウ11


安二六オ6

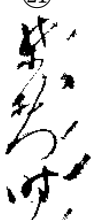
「ありとかや」≪ＵＵＦＵＳ≫から≪ＤＵＤＵＤ≫に変更し、八左衛門本はそれを写す。「あり」は第二類動詞なのでアクセントを反映する。

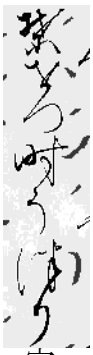
⑳

自一九ウ12

安二六オ6・7

「春の」≪ＤＵＤ≫を≪ＳＵＤ≫に改めている。「春」は第五類ＬＦで、訂正前のほうがアクセントを反映している。八左衛門本の「春」の胡麻章でもアクセントを反映しているとはできない。

なお、「これ」は自筆本≪ＤＵ≫、八左衛門家本≪ＵＵ≫で異なる施譜である。自筆本は直したようにも見えるが確認できない。「是」は第一類ＨＨなので、自筆本は語頭低下、八左衛門家本のほうがアクセントに忠実な施譜である。

㉑

自二〇オ3


安二六ウ4

「おつ（落）」≪ＵＵ≫を≪ＤＵ≫に変更し、八左衛門本はそれを写すが、仮名遣いまでは写していない。「落つ」は第二類動詞で、終止形はＬＨであり、訂正した胡麻章がアクセントを反映する。

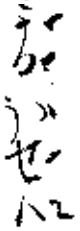
「哀傷第二・物哀躰曲味」の「曲節舞」の部分では、

㉒

自二一オ3

安二八ウ7

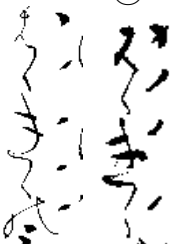
「うち(内)」≪ＤＵ≫から≪ＵＤ≫に変更し、八左衛門本は変更後と一致する。「内」は第二類ＨＬであり、訂正後の胡麻章は、アクセントどおりである。

㉓

自二一ウ1

安二九オ6

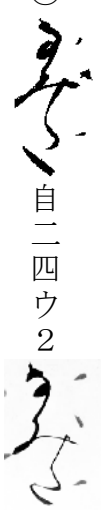
「うるほせは（潤）」≪ＤＤＤＵ＊≫から≪ＵＵＤＵ＊≫に変更し、変更後の胡麻章からはＨＨＬＬＬのアクセントを推定できる。アクセント体系変化前にはＬＨＨ『名義・解脱』の例があり、ＬＬＬＨ＞ＨＨＬＬに変化したと考えられ、『平節』に「うるほす」ＨＨＬＬ（８上禿童 2-5 口説）がみられる。

「小歌上」の例では、

㉔ 
自二一ウ７
安二九ウ６

「はゝきゝの」≪ＵＵＵＵ≫から≪ＤＵＵＵＵ≫への変更である。「帚木」のアクセント例はないが、八左衛門本も変更後の胡麻章を写しているところから、アクセントはＬＨＨＨのアクセントであったか。「帚」は、ＬＬＨ『和名・名義』、ＬＨＨ『名義』、「ははきもち（帚持）」ＬＬＨＨＨ『巫私』の例があり、複合して体系変化の後にも低起式を保つアクセントであったのだろう。

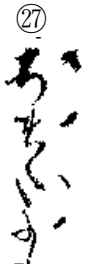
「蘭曲第二・若声・躰曲味」の「指声」の例では、

㉕ 
自二四ウ２
安三三ウ１

「なみだ」≪ＵＵＵ≫から≪ＵＤＵ≫への変更で、八左衛門本は変更後の胡麻章に一致する。「涙」第五類ＨＬＬのアクセントを≪ＵＤＵ≫は反映する。

㉖
自二四ウ３
安三三ウ２

「この世」≪ＵＵＤ≫から≪ＵＤＤ≫に変更をしている。八左衛門本は変更前の胡麻章を写す。アクセントはＨＨＨなので、「この」を強調したか。

㉗ 
自二四ウ５
安三三ウ５

「ちまた（巷）」≪ＵＵＤ≫から≪ＤＵＤ≫に変更し、八左衛門本は変更後と一致する。「巷」のアクセントは『和名・名義・字鏡・袖中・浄拾』ＨＨＨであるが、『補忘』ＬＨＬでこれと合致する。室町期ＬＨＬであったのであろう。

胡麻章の変更箇所を検討したが、すべてを網羅してはいない。多くがアクセントを忠実に反映する胡麻章への変更である。

変更として多いのが、≪ＵＵ…≫と付した胡麻章を単語アクセントに合うように≪ＤＵ…≫と変更した例である。第四類「数⑬・松②」、第五類「影①・露⑫」、第二類動詞「繰る（来る）④・酔ふ⑧・落つ㉑」、「巷㉗・帚木㉔・あひあふ⑤」などがこれにあたる。なぜ高く胡麻章を付けられていたのかを、いずれ節との関係から明らかにしなければならない。

次に、高起式の下降位置を訂正した例に第三類「花⑥・夢⑪」、第四類「別れ⑨」、第五類「涙㉕」、「清水⑦・面白⑧」、第二類形容詞「広し③・同じ⑮」が挙げられる。

八左衛門本は、自筆本がアクセントに合わない変更をした場合に、変更前の胡麻章を写す例もみられる。

また、⑮⑱のように区切り直前の語の最後が上がる胡麻に書き換えられている箇所がある。訂正箇所ではないが、⑤の「色」もこれと同様の胡麻章である。これらはアクセントではなく、区切りのイントネーションを付したものと考えられる。

四　アクセント反映度

［四―一］二、三拍名詞アクセント反映度

禅竹が付した胡麻章はどの程度アクセントを反映しているのだろうか。語類の判明している語やアクセントの推定可能な二拍、三拍名詞についてみることにする。近世音曲では、江戸発生の音曲においても二拍名詞が上方アクセントで作曲されることもあり、特にアクセントに一致するか否かが分かりやすいと考えられる(10)。『五音三曲集』の謡引用部分について例の多い節付けごとにアクセントの反映を検討する。

「さしこゑ」「さし声」「さしこと」「さし」を「指声」に、「曲節舞・節曲舞」を「曲舞」、「うたふ」を「謡」とした。稿末の表1、表2に集計結果をまとめ、アクセント反映度のみを左に示す。

型一致率と式不一致率はそれぞれの節付けにおける総数との割合で、高起式と低起式一致率はそれぞれの式のアクセントが推定される語のうち、出現した割合を算出した。

【二拍名詞まとめ】

	型一致	高起式一致	低起式一致	式不一致
指声	51例 57.3%	52例 80.0%	15例 62.5%	22例 24.7%
曲節	39例 68.4%	28例 71.8%	13例 72.2%	16例 28.1%
謡	13例 56.5%	12例 92.3%	8例 80.0%	3例 13.0%
上	45例 52.9%	41例 74.5%	24例 80.8%	20例 23.5%
下	19例 50.0%	21例 77.8%	6例 54.5%	11例 28.9%

二拍名詞は右のようにまとめられ、アクセント型まで一致するのは「曲節」「指声」「謡（うたふ）」「上」「下」の順で七割以下である。式の不一致率は「下」「曲節」「指声」「上」は二割以上みられる。

「指声」と「上」は用例数が近いが、アクセント一致率が大きく異ならない。節付けによりアクセントを活かすのかどうかは断定できないが、用例が少ない「うたふ」の節付け部分の一致率が高く、「下」の一致率が低い。

【三拍名詞まとめ】

	型一致	高起式一致	低起式一致	式不一致
指声	27例 41.5%	45例 91.8%	10例 66.7%	10例 15.4%
曲節	9例 27.3%	22例 84.6%	4例 57.1%	7例 21.2%
謡	8例 53.3%	12例 92.3%	1例 50.0%	2例 13.3%
上	19例 47.5%	26例 78.8%	7例 100.0%	7例 17.5%
下	7例 28.0%	15例 75.0%	5例 100.0%	5例 20.0%

三拍名詞になると語類の明らかな語が少ないこともあり、型との一致率が節付けごとに異なる。高起式アクセントへの一致率が高くなること、式不一致率が減るなど、アクセントに配慮した胡麻章ではある。

二拍、三拍をとおして見ると、語例が少ないため、「謡（うたふ）」の節付け部分がアクセントを反映しやすいとは言いにくくはあるが、「謡（うたふ）」「指声」が幾分アクセント反映の割合が高いようである。二拍、三拍ともに式不一致率が高いのは「曲節舞」である。

平曲の「白声」「口説」のように音楽性の皆無または稀薄な曲節に節博士がある場合と異なり、謡は「詞」に胡麻章を付けないこともあり、アクセントの反映率は高くない。謡においては、アクセントを活かすかどうかは節付け以外のところに要因があるか。

［四―二］アクセントを反映しない胡麻章

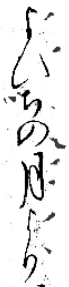
［三―二］でアクセントを反映しない胡麻章として、区切れ直前の語に付された胡麻章について述べた。ここでは、二拍の同じ語に異なる胡麻章が付けられたものについてその理由を検討してみる。

二拍名詞で延べ語数が多いのは「月・花・影・秋・

上・春」である。

多数例のある語のうち、第三類で体系変化後はＨＬの「月・花」についてみる。「花」については［三―二］⑥で取り上げ、⑳もアクセントに合う例である。「月」については次がアクセントと一致する例である。

自一六オ６


自九オ５

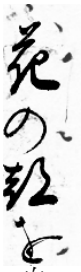
前者は≪ＵＤ≫後者は≪ＵＳ≫の胡麻だがこれらもアクセントに一致する。

自四ウ３

自三〇ウ６

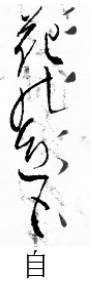
自一六オ１

自三〇オ４


自四オ２

以上の五例は息継ぎのあとの謡い出しの部分にあたるため、語頭低下を示す胡麻章≪ＤＵ≫が付されていると考えられよう。四ウ３以外の「月・花」の前には区切り点が見られる。

自一一オ８


自一一ウ５

「の」に続く「月」三例、「花」四例が「月の≪ＵＵ*≫」のようにＨＨを反映する胡麻章が付けられている。第三類に「の」は従属的に接続するので、アクセント体系変化によりＬＬＬ>ＨＨＬに変化した型が現れることがある。これもアクセントをよく反映した例としてよい。

説明しにくいのが次の例である。

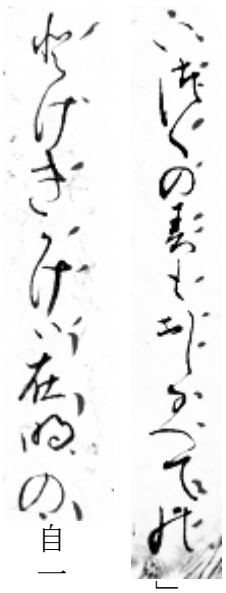
自六オ８

「月」の前に区切り点があり、語頭低下の胡麻章が付けられてもよいはずであるが、「月」の高起式を保つ施譜例である。

次に低起式の第五類「影・秋・春」についてみる。アクセントの反映する胡麻章については、［三―一］で「秋」、［三―二］①で「影」、⑤⑳で「春」を取り上げた。アクセントを反映しない例をみる。

自二〇オ２

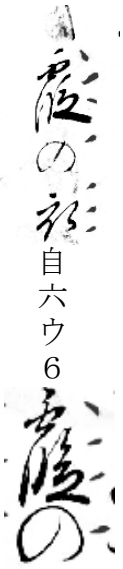
「はるさり秋きたつて」という対の表現部分の「春」「秋」ともにアクセントに外れる胡麻章が付けられている。



自一二オ１・２

「いつくの春もおしなへて。のとけきかけは在明の」と韻律を整えてあり、「春」「影」が同じ位置にある。ともにアクセントを反映しない胡麻章である。

三拍名詞には、自筆本と八左衛門本とが異なる施譜例もみられる。



自六ウ６　安九オ２

自筆本は≪ＤＵＤ≫、八左衛門本は≪ＤＵＵ≫で三拍目の胡麻章が異なる。第一類「霞」の直前に区切りがあり、息を継いで語頭低下で発音されるのだが、八左衛門本のほうがアクセントの反映としてはよい。八左衛門本は自筆本のまま書写せずに、訂正を加えて写すこともあったのであろう。

五　おわりに

金春禅竹自筆『五音三曲集』の胡麻章について、その写しである八左衛門本と比較しながら検討したが、次のようなことがわかった。

① 胡麻章は基本的には文字の右側に付すが、綴じ目のノドがきついなどで、右側に書けない場合には、節博士と同様に左側に付すことがある。

② 禅竹自筆本における胡麻章の変更はアクセントの反映度を高めるものである。

③ 胡麻章は区切り点の直前では、アクセントではなく上昇のイントンネーションを表す可能がある。

④ 息継ぎの区切り点の後には、高起式アクセントの語頭低下がみられる。

⑤ 韻律的な対応や対表現があると、アクセントに関わらない胡麻章が付される。

『五音三曲集』の胡麻章の施譜は、禅竹が述べるほどには厳密ではない。助詞にいたるまで細密にアクセントを反映はさせておらず、むしろ助詞のアクセントに外れる場合も多い。この点では「節訛り」を取り入れているとみてよい。八左衛門本には、安喜が禅竹自筆本を書写するにあたって胡麻章を正しく理解し、自筆本に間違いがあれば直したうえで、写していることもうかがわれる。仮名遣いや用字法は改変しても、胡麻章にはむやみな改変を施していない。胡麻章の伝承

には厳格な配慮がなされており、謡を正しく伝えることが重要であったと理解できる。

以上に鑑みると、室町期謡本の胡麻章は、単語の出現位置や韻律的な対応などを考慮することによって、アクセント史の資料として十分に活用することが可能といえる。

注1 添田建治郎（一九七二）「アクセント資料としての謡曲譜本の意義」『語文研究』三四、同（一九七四）「謡曲譜本に反映したる和語アクセント―体系と若干の音韻史上の問題をめぐって―」『文学研究』七一、同（一九八一）「謡曲譜本における型の旋律」『山口国文』四

坂本清恵（一九九七）「アクセント資料としての世阿弥自筆能本―声点を中心に―」『国語研究』六〇、同（一九九九）「世阿弥自筆能本からみたアクセント体系変化の時期について」『国文学研究』一二八（『中近世声調史の研究』笠間書院、二〇〇〇年所収）

2 国文学研究資料館電子資料館、所蔵和古書・マイクロ／デジタル目録データベース

3 野上記念法政大学能楽研究所―能楽資料デジタルアーカイブ

4 表章・加藤周一（一九七四）『世阿彌　禪竹』日本思想大系　岩波書店

5 前田富祺（一九六五）「能楽論におけるアクセント観」『国語学研究』五

桜井茂治（一九七六）「世阿弥の能楽書とアクセント―室町時代のアクセント資料として―」『國學院雑誌』六六の二・三

6 坂本清恵（二〇〇〇）「謡曲における訛りとアクセント」『中近世声調史の研究』笠間書院

7 秋永一枝他編（一九九八）『日本語アクセント史総合資料　研究篇』東京堂出版

8 注6と同。

9 坂本清恵（二〇〇二）「胡麻章の変容―声譜から句切り点へ―」『国語学研究と資料』二五で述べたが、義太夫節正本にも区切りの胡麻章がみられる。

10 金田一春彦（一九七四）『国語アクセントの史的研究　原理と方法』塙書房　二九四頁。

［参考文献］

上野和昭編『平家正節　声譜付語彙索引』上（あ～そ）二〇〇〇年、下（た～を）二〇〇一年、アクセント史資料研究会

『補忘記　貞享版』一九六二年、白帝社

『補忘記　元禄版』一九六二年、白帝社

なお、本稿を成すにあたり、国文学研究資料館、野上記念法政大学能楽研究所に掲載のご許可をいただいた。ここに御礼申し上げる。

―日本女子大学文学部―

語類	出現アクセント	指声	曲節	謡	上	下
1類	HH	13	9	2	7	2
	HL	3	0	2	4	0
	語頭低下	1	5	0	8	4
2・3類	HL	21	16	4	18	10
	HH	10	0	2	12	8
	語頭低下	8	6	1	6	2
4類	LH	7	7	3	12	5
	LF	0	1	0	0	0
	HH	0	0	0	3	1
	HL	1	2	2	0	1
5類	LF	4	4	4	8	1
	LH	3	1	1	1	0
	HH	2	1	0	3	0
	HL	3	0	0	0	3
類別不明	高起式型一致	5	3	0	0	1
	低起式型一致	1	0	0	0	0
	高起式のみ一致	0	0	2	0	0
	低起式のみ一致	0	0	0	3	0
	式不一致	7	2	0	0	0
合計1	推定高起合計	65	39	13	55	27
	推定低起合計	24	18	10	30	11
	合計	**89**	**57**	**23**	**85**	**38**
集計1	型一致	51	39	13	45	19
	高起式一致	52	28	12	41	21
	低起式一致	15	13	8	24	6
	式不一致	22	16	3	20	11
集計 2	型一致	57・3%	68・4%	56・5%	52・9%	50・0%
	高起式一致	80・0%	71・8%	92・3%	74・5%	77・8%
	低起式一致	62・5%	72・2%	80・0%	80・0%	54・5%
	式不一致	24・7%	28・1%	13・0%	23・5%	28・9%

表２　三拍名詞集計

語類	出現アクセント	指声	曲節	謡	上	下
１類	HHH	7	2	2	3	1
	HHL	2	2	1	1	1
	HLL	1	0	1	0	0
	語頭低下	1	1	0	4	0
２･４類	HHL	2	4	3	4	1
	HHH	6	2	1	3	2
	HLL	4	2	0	1	1
	語頭低下	1	1	0	2	0
２△４△	合致	3	0	0	1	1
５類	HLL	6	0	1	1	2
	HHL	2	0	1	3	2
	HHH	0	1	1	2	0
	語頭低下	0	1	1	1	1
６類	LHH(LLH)	2	0	0	4	1
	HHH	2	0	1	0	0
７類	LHL	1	0	0	0	0
	LHH	1	2	0	0	1
	HHH	1	0	0	0	0
	HHL	0	1	0	0	0
類別不明	高起式型一致	5	2	1	4	1
	低起式型一致	1	1	1	2	0
	高起式のみ一致	10	7	0	4	4
	低起式のみ一致	2	1	0	0	2
	式不一致	5	3	0	0	4
合計	推定高起合計	49	26	13	33	9
	推定低起合計	15	7	2	7	5
	合計	**65**	**33**	**15**	**40**	**25**
集計１	型一致	27	9	8	19	7
	高起式一致	45	22	12	26	15
	低起式一致	10	4	1	7	5
	式不一致	10	7	2	7	5
集計１	型一致	41･5%	27･3%	53･3%	47･5%	28･0%
	高起式一致	91･8%	84･6%	92･3%	78･8%	75･0%
	低起式一致	66･7%	57･1%	50･0%	100･0%	100･0%
	式不一致	15･4%	21･2%	13･3%	17･5%	20･0%